

2022 年度事業計画

新型コロナウイルス感染拡大がもたらした、いわゆる「コロナ禍」は 2 年以上続いた今も沈静化せず、私たちの生活にさまざまな影響を及ぼしています。しかしながら、教育・保育界は「子どもたちの学びを止めない」という先生方の強い意志の元、さまざまな工夫や懸命な努力を経て、コロナ禍を乗り越えつつあります。例えば、在宅授業のツールとして導入された ICT 機器はいまや、学校での授業においても子どもたちの学びを深めるツールとして見直され、学習スタイルの変革を促しています。コロナ禍での経験を今後の教育・保育に生かすチャンレンジにつなげています。

また、コロナ禍での開催となった東京と北京でのオリンピックにおいてはひたむきなアスリートたちの姿に胸打たれるものがありました。中でも結果に関係なく、選手が相手選手の個性（多様性）を認め、互いにたたえ合う姿や目標を目指して努力を惜みず、失敗しても諦めないで立ち向かう姿は、まさに財団が提唱する「科学する心」の育ちに関わることであり、子どもたちに身に付けてほしい資質・能力の一つでした。来期の事業計画ではコロナ禍以前の事業水準を想定しながら、「科学する心を育てる」理念に立ち返って策定しています。

財団では引き続き、子どもたちが未来においても自分らしく、輝いて活躍できることを目指した教育・保育を追求していきます。

【公 1】 科学教育を中心とし、乳幼児および児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業

教育実践論文募集をベースとした本事業は、当財団の主幹事業であり、主題に沿った教育実践の論文を募集し、優れた実践を選定し、その学校・園に対し、助成を行うものです。また、助成するにとどまらず、その具体的な活動をベストプラクティスとして、他校・他園に紹介し、ともに研鑽していくことを目的としています。

これまで長きにわたり、応募数の増加に重きを置いてきましたが、今後は応募数だけでなく、論文の質的向上とそれを担う先生方（執筆者）の発掘と支援に主眼を置きます。また、実践事例の全国への波及についても、今までに蓄積してきたオンライン形式の積極活用をしながら、より効果的で、より多くの方に届けられるよう推進していきます。

1. 乳幼児教育（ソニー幼児教育支援プログラム）

本プログラムは「科学する心を育てる」を論文主題として、保育の実践をまとめた論文を募集しています。前期はコロナ禍の混乱により応募数が大きく減少しましたが、今期はコロナ禍が続いているにもかかわらず、過去最多となる 155 園から論文が寄せられました。内容も地域の特色を活かした保育や、今まで以上に科学的着眼点をもった研究が増えています。また、子ども自身の思いや考えを身体や言葉、音、絵・造形やものづくりなどに表現する活動への広がりが見られる事例もみられ、STEAM 教育とも繋がりをみせ、さらにはそれを超えて「科学する心」と「芸術」との架橋・融合の実践へと、今後の発展が期待されます。社会的にも乳幼児期からの教育が注目される中、今まで以上に論文の質にもこだわり、「科学する心」を育てる保育の進化と深化にチャレンジしていきます。

（1）保育実践論文の質的向上（新規性と多様化の促進）

来期、保育実践論文は事業開始から 20 周年を迎えます。この間、当論文事業の認知は進み、応募数も着実に増え、「科学する心」を育てる保育の深堀りがされてきました。しかし一方で、従来のもをよよく研究してきてはいるものの、類似した実践が増えていることも否めません。20 周年の節目の年に当たり、今まで以上に質的向上に目を向け、とくに保育の新規性や園のユニークさが際立つような多様性と独創性ある実践を求めています。具体的には募集要項の改定、評価（審査）ポイントの開示、査読審査の体制見直しなど、一連のプロセスを改革していきます。また、「科学する心」をより深く理解いただけるワークショップ（論文説明会）も新たに開催するなど、関係者とも丁寧なコミュニケーションをとりながら、推進していきます。

(2) ベストプラクティスの共有を目的とした「発表会・研究会」などの開催

① 集会方式「発表会・研究会」の再開（予定）

最優秀園受賞園による保育実践（ベストプラクティス）の「発表会・研究会」を開催いたします。来期は最優秀園に選定された「幼保連携型認定こども園 愛の園 ふちのべこども園（神奈川県）」および「京都市立明德幼稚園（京都府）」、加えて優秀園の中から審査委員特別賞として選定された「認定こども園 いぶき幼稚園（兵庫県）」の3園が開催を決め、準備を始めています。この2年間はコロナ禍のため、「発表会・研究会」はオンライン形式としておりましたが、来期は現地に出向き、直に子どもたちの様子を見ながら保育者が語り合う集会方式の再開を目指します。一方で、コロナ禍の状況に応じ、オンライン方式に切り替えられるよう、柔軟に準備を進めていきます。開催形態はどうあれ、参加者が「科学する心を育てる保育」についての理解を深め、各園の保育の質の向上と地域の「科学する心」の啓発に繋がるイベントとして、開催園とともに作り上げていきます。

② オンライン方式の活用

優秀賞受賞園に実践を発表いただく「提案研究会」は園の任意による開催（集会方式）としてきましたが、来期は開催園や参加者の負担軽減の観点から、すべてオンライン方式によるものとし、今までのノウハウを活かして開催しやすい環境を用意していきます。保育者会員組織「乳幼児のための『科学する心』ネットワーク」のイベントとも連動させ、気軽に参加できるカジュアルながらも学びの深い研究会を目指します。オンライン開催を柔軟に使い分けていきます。

(3) 実践事例の紹介

論文主題「科学する心を育てる」に関する実践の普及や啓発活動については、「発表会・研究会」のようなイベント開催だけでなく、様々な媒体を通じた発信も引き続き実施していきます。財団ウェブサイトや SNS などを通じて、「保育のヒント」と題したコラム記事欄を用意、論文の中から他園の参考になる具体的な実践事例を取り上げ、定期的に紹介、掲載します。また、刊行物としては毎年好評いただいている『「科学する心を育てる」実践事例集』がありますが、来期は保育実践論文 20 周年を迎えるにあたり、「実践事例集 20 周年記念号（仮称）」の制作を進める予定です。「保育のヒント」も「実践事例集」もどちらも園からは保育者研修で活用いただいているとの声もあり、今後とも他園の明日の保育にすぐ役立つ事例を解説とともに紹介していきます。

(4) 「科学する心を見つけよう」フォトコンテスト

このフォトコンテストは保護者が子どもたちの自ら心を動かし、探求や感動している「科学する心」の姿に気づき、その心を育ててもらふことを目的にしています。15 回目を迎えた今期は 286 作品の応募をいただきました。

これまで、このフォトコンテストはこれまで多くの子どもたちの好奇心あふれる顔や表情の写真が寄せられてきましたが、昨今、多くの方々が SNS の普及で手軽に写真を投稿するなど、大きく生活様式が変わる中、現在のコンテスト形式としては今期をもって終了することにいたしました。今後は財団の唱える「科学する心」を広く世の中に知ってもらふ趣旨はそのままに、広報事業の一環として新しい活動に転換していく予定です。

2. 子ども科学教育（ソニー科学教育プログラム）

本プログラムは小・中学校を対象に、「科学が好きな子どもを育てる」を主題とし、理科を中心に、教育（授業）の実践に関する論文を募集し、優れた取り組みを進める学校に対して助成を行うものです。最優秀賞選定校は必ず翌年に「子ども科学教育研究全国大会」を開催し、全国の先生方や教育関係者にその授業や学校の取り組みを公開し、ともに学ぶ場を提供しています。また、今期からは教員個人が応募できる「教育実践計画」の募集もスタートさせ、初回にもかかわらず 44 名の先生方に応募いただきました。

(1) 教育実践論文のゼロベースでの見直し

今期、「教育実践論文」は 161 校から応募をいただきました。残念ながら前年より 26 校の減少、とくに小学校からの応募減が目立つ結果となりました。内容的には今まで同様、理科・生活科の単元の授業が中心に、観察、実験、体験的な学習、探究学習などにより科学の面白さを実感させ、子どもたちが主体的に学んでいる姿をまとめているものが多く見られました。また、GIGA スクール構想の推進によって ICT 機器を活用した授業実践についての内容が増えているのも特徴です。一方で、応募校の広がりが見られず、執筆者（先生）が固定化され、学校全体での活動につながっていないものも多く、内容のマンネリ化が進んでいることも否めません。現在の主題「科学が好きな子どもを育てる」についても導入からすでに 20 年以上が経過しており、その間社会や価値観が大きく変わる中、その意味合いも変化してきています。反面、学校教育は従来そのまま単元学習の域にとどまっており、VUCA とも言われる新しい時代における論文主題の本質に迫るのは難しくなっています。これからますます高度化し、複雑化する社会で生きていく子どもたちのための教育は何かを改めて考える時期にあるとの認識から、そのことを言及する「教育実践論文」にしていきたいと考えています。来期は募集要項やプロセスを改善し、応募者の間口を広げることで、応募数の増加と質の向上を目指し、翌年の 23 年度には論文主題も含めた抜本的な見直しを検討していきます。

(2) 教育実践計画の拡大推進

導入 2 年目を迎える「教育実践計画」についてはさらなる拡大を目指し、積極的に推進していきます。この「教育実践計画」は将来を担う子供たちに必要な能力や資質は何かを考え、その育成についての今後の教育方針や授業計画について、教員個人から提案いただくものです。初回となった今期は 44 人の先生方から応募いただきましたが、その約半分の方が従来論文への応募歴がなく、新たな関心層の呼び込みにつながりました。また、教科も理科・生活科に限らないことから、国語、音楽、体育、算数（数学）など幅広い教科からいろいろな角度からの提案をいただきました。審査の結果、5 名の実践計画を入選として選定し、来期には提案された計画の実行を促していきます。従来の「教育実践論文」では多くが授業単元ごとの知識を教える授業の創意工夫を述べるものでしたが、この「教育実践計画」では今までとは違う切り口で教育を見つめ直してもらい、広い視野と高い視点からの新しい教育実践につながることを期待しています。今後とも「教育実践計画」を拡大、発展させ、個人で提案された「計画」が学校において「実践」され、質の高い「教育実践論文」となって応募されてくるサイクルになることを目指します。

(3) 「子ども科学教育研究 全国大会」の開催

最優秀賞校の実践事例を発表いただく全国大会については、前期はコロナ禍のため、ウェブ掲載による発表会としましたが、今期は初のオンライン形式にて開催いたしました。当日は 200 名を超える多くの先生や関係者の方々にご出席いただき、授業動画やパネルディスカッションなどオンラインならではの内容を盛り込んだものとなりました。一方、来期に向けてはコロナ禍終息を前提に、従来の集会方式の再開を目指し、公開授業や協議会、パネル発表など、「科学が好きな子どもを育てる」教育に関わる情報交換や地域を超えた教員同士の交流を図る大会を計画しています。一方で、未だコロナ禍の動向は定かでないため、オンラインなど集会方式に代わる開催方法も並行して準備していきます。開催校については、今期、最優秀校に選定された「横浜市立立野小学校（神奈川県）」、「刈谷市立朝日中学校（愛知県）」の 2 校で、すでに開催に向けた検討を始めています。

3. 対外広報活動

教育・保育実践論文および教育実践計画については応募数増加に加え、質の向上も目指す方針のもと、学校・園、教員・保育者、教育委員会や校長会などの教育機関や教育団体に向けてのコミュニケーションを再活性化します。財団と関係の深い「ソニー科学教育研究会（SSTA）」や財団が運営する保育者組織「乳幼児のための『科学する心』ネットワーク」の会員をベースに、関係団体・関係者のネットワークを拡げ、DM、ウェブサイト、SNS などを

積極的に活用し、様々な情報をタイムリーに提供していきます。今まで活用してきたメディア媒体についても見直し、発信する情報と訴求対象にあわせて最適なメディアを使い分けていけるように再構築します。

また、幼児教育支援プログラムの『『科学する心』をみつけようフォトコンテスト』は今期をもって終了しますが、子どもたちの「科学する心」の姿や表情を広く世に伝えるとの趣旨は引き継ぎ、広報活動の一環とした新しい形態の事業に発展させます。具体的にはSNSを活用してスマートフォンなどで撮影した「科学する心」を発現する子どもたちの写真をいつでもどこでも手軽に投稿いただき、より多くの人々と共有できるプラットフォームを用意し、公開する予定です。さらに寄せられた写真の中から、多くの人々から共感を得た写真をピックアップし、カレンダーとして提供する企画も進めています。

【公2】 科学教育を中心として豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

この事業は子どもたちが自らの「科学する心」を感じ取り、引き出し、大きく発揮できる体験を提供することで、「科学する心」の育ちにつなげていこうとするものです。現在、「科学の泉－子ども夢教室」と「ソニーものづくり教室」の2事業によって構成しています。

1. 科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉－子ども夢教室」は、『自然に学ぶ』をテーマに、小学校5年生から中学校2年生までの28名の子どもたち（塾生）が参加し、ノーベル化学賞を受賞された白川英樹博士を塾長に、指導員として全国から選抜された小・中学校の先生方7名の参加を得て開催している5泊6日の自然体験教室です。

この2年間はコロナ禍の影響で開催中止としてきましたが、今後についてコロナ禍終息を前提としても、子どもたちの主体性による集団生活であるという事業リスクの大きさに鑑み、来期も開催をとりやめることにしました。

一方、毎年恒例となっている卒塾生との交流会については、今期も集会での開催は見送りましたが、昨年同様に、近況報告を中心とした冊子の発行に加えて、「科学の森」と題する卒塾生による研究発表誌の刊行するなどして、卒塾生の縦のつながりを継続しています。来期はコロナ禍の状況によりますが、集会方式も含め、卒塾生から選ばれた交流会企画メンバーと、より良いイベントを継続できるよう検討していきます。

2. ソニーものづくり教室

ソニーグループの技術者や学校・園の先生方が講師となって児童・生徒を対象に行う「ものづくり教室」についてもコロナ禍の影響を大きく受け、前期より、子どもたちを会場に集めた開催はとりやめ、オンラインを活用したコンテンツでの開催を実施しています。その中でも、高校生向けに開催している「エンジニア体験プログラム」ではオンラインながら、ソニーのエンターテインメントロボット“aibo”のオリジナル動作アプリケーションを企画提案し、実装するまでを体験してもらうもので、全国からインターナショナルスクールも含む6校の参加を得て開催し、ソニーらしいプログラムと好評を得ています。来期は開発期間を長くするなど内容をより充実させて開催する予定です。また、小学生を対象にしたaibo体験プログラム（1日型）の開催も新たに検討しています。

3. 新規プログラム（ものづくり）の開発

ソニーと財団の強みが生かせる「ものづくり」を通じて、学校の授業や課外活動以外で、子どもたちに宿る『科学する心』を引き出し、体現できる機会を直接提供し、『『科学する心』を育み、『科学が好きな子ども』を育てる』ことにつながる今までにない新しい体験プログラムの開発と立ち上げを進めていきます。来期はその構想を固める年と位置付け、専任組織を設けて検討を始めています。

【公3】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

財団の目指す「科学する心」をはぐくみ、「科学が好きな子ども」を育てるには、教育現場を預かる先生や保育者の方々が、これらの理念をしっかりと理解し、効果ある教育・保育をいかに実践していただくが重要になります。財団では引き続き先生や保育者の方々への理解を深め、新しい教育・保育の実践支援を強力に推進していきます。

1. 乳幼児教育

(1) 保育者ネットワーク（会員組織）の拡充

2年前に発足させた保育者の個人会員組織（乳幼児のための「科学する心」ネットワーク）は会員数が約650名に達し、会員限定のSNSやオンライン研修を通し、地域や学校・園を超えた会員同士の交流など活動が盛んになってきました。来期もこの会員組織を拡充、会員同士が学びあえる環境を整備しながら、保育者の方々が誇りと自信をもって「科学する心を育てる」保育に取り組んでいただけるよう支援していきます。

① オンラインによる研修会の充実

今期よりオンラインによる会員限定の研修会をスタートし、定期的開催、多くの保育者の方々に参加いただきました。保育の研究者や専門家による最新の保育事情などの講演会やICTやSTEAM教育など先進的な取組を行う園による研究会など内容は多岐にわたり、すぐに保育に役立つ内容を意識してコンテンツを提供しています。財団からの一方的な情報提供に終わらず、会員同士や第三者からの学びや刺激が与えられる場となるように、来期も様々な切り口から、ともに学び合える研修会を充実させていきます。

② 会員による自主研究会への助成強化

従来から複数園による勉強会「地域自主研究会」の開催を奨励し、助成を行ってきました。今期は10道府県で開催されており、今後も継続される予定ですが、来期はこれに加えてネットワーク会員を対象に、会員同士が共に学びあう環境を支援する新しい助成制度を立ち上げます。オンラインによる生活様式も定着してきており、地域に関係なく、「志」のある会員が気軽に話し合える、勉強し合える場づくりを目指します。研究会には保育界や保育現場の有識者の参画もお願いし、学術的な観点（理論）と現場（実践）の視点を伴った往還型の研究会（勉強会）にしていく予定です。

③ 外部保育研修団体との提携した研修会の立ち上げ

財団の提唱する「科学する心を育てる」という理念をベースに、外部の保育研修（研究）団体と提携したネットワーク会員限定の研修会を新たに導入します。研修会では自然豊かな環境の場所で大自然と向き合いながら、「科学する心」について、とことん考え、その後、オンラインによるフォローアップでさらに学びを深めてもらうものを目指しています。多くの園が自然現象を題材とした「科学する心」の保育を実践していますが、保育の現場を離れて保育者自身が「科学する心」を体現することで、より深い理解とこれからの保育への手掛かりがみつかる研修会となることを期待しています。

(2) 保幼小中連携プロジェクト発足

最近、注目されている乳幼児教育と学校教育をつなぎ、連携させていくことを目指す「保幼小連携」に関連し、財団のもつ乳幼児教育と学校教育（小中学校）のネットワークを生かし、「科学する心」を共通の価値観とした「保幼小連携プロジェクト」を発足し、財団ならではの活動に取り組みます。すでに保幼小接続事業に関与されている先生方とご相談を始めており、来期は本プロジェクトの目指すゴール、成果物などを明確にしなが、具体的な活動内容とそのロードマップを固めていく予定です。2年目となる2023年度からは園と学校、保育者と教員を巻き込んだ具体的な活動を開始していく予定です。

2. 子ども科学教育

(1) ソニー科学教育研究会 (SSTA) への支援

SSTAはソニー教育財団の理念に賛同し、実現のために実践を推進する先生方の任意団体で、全国に47支部、約1,800名の会員を擁しています。自治体の枠を越えて全国の教員がつながり、教育実践論文の主題である「科学が好きな子どもを育てる」を共通のテーマにした授業研究や研修会の開催など独自の活動をしています。引き続き、SSTAと共通の理念に根ざした、より良い教育のあり方を議論し共有しながら、その活動を支援していきます。

研修会の中でも前期トライアル導入した「トップリーダー研修会」は修了年度を迎え、研修員（修了生）が研修後に職場で、リーダーとしての学んだことを実行に移すフェーズになります。実践で成果の出る研修として引き続き支援していきます。また、今期は休止してリニューアルを検討していた「エリア研修会」については、全国を6つのエリア（北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄）に分けて、「課題解決力」を高めることを目的に、内容をリニューアルして再開いたします。SSTA ならではの授業力向上を目指し、各エリアが同じテーマで取り組むことで、互いに切磋琢磨し、学びを共有できるプラットフォームとして立ち上げ、支援していきます。

(2) 教員個人へのアプローチと支援強化

今期、ソニー科学教育支援プログラムの新施策として、教員個人を対象とした「教育実践計画」を導入し、教員個人への支援を開始しました。初回にもかかわらず、44名の教員から応募いただきました。そのうち半数は従来論文の応募歴のない方々であり、SSTA 会員のみならず、全国にいる意欲ある先生方の存在を感じることができました。来期は「教育実践計画」の応募拡大を通じ、こうした意欲ある教員の発掘を進め、財団活動に取り込んで支援できるような仕組み作りをスタートさせます。また、ソニー科学教育プログラムについてもさまざまなルートを通じた広報・周知活動を展開し、財団活動や助成についてのこまめな情報発信により、教員個人とつながるネットワークの構築を進めていきます。2023年度以降には財団主催の教員個人向け研修会や自主的な研究会・勉強会への支援などの本格的な助成を開始することを検討しています。

以 上